

図書館だより



No. 1

平成 28 年 5 月 2 日発行

新学期が始まって、気づけば早1ヶ月。始業式から始まり、入学式、オリエンテーション、部活動入部、フレッシューズキャンプと、1年生はてんやわんやの1ヶ月だったかと思いますが、少しずつ高校生活に慣れてきたでしょうか。秋草でのこれからの3年間を充実したものに、愛され信頼される女性へと成長していきましょう。またみなさんに渡した秋草百選を活用しながら、たくさんの本とも出会っていきましょう。

2、3年生もそれぞれが新しい学年としての1ヶ月を過ごし、学校生活が落ち着いてきた頃でしょうか。新たな気持ちでまた1年間を頑張っていきましょう。

さて、明日からは世間は大型連休に突入します。途中に平日を挟んではいますが、連休が続きます。部活に励む人、ゆっくりする人、旅行をする人、過ごし方はそれぞれだと思いますが、みなさん良い連休を過ごしてくださいね。連休でたくさん読書しようと思っている人は図書館でまとめ借りしていきましょう。

委員会活動も充実を*

B913.6-ヤ『吉野北高校図書委員会』 山本 渚 || 著 KADOKAWA

徳島県徳島市にある吉野北高校。2年生のかずらが所属するのは図書委員会。大好きな本に囲まれ、頼もしい仲間と可愛い後輩に恵まれ、委員会活動に精を出している。だけでも、その居心地のよい図書委員会の中で複雑な恋愛模様が巻き起こってしまう。相手を思いやるあまり自分がつらくなったり、自分のことなのに答えが分からなかったり、大いに悩むかずらと図書委員の仲間たち。それでも決して泥沼にならないのは、それぞれが心の優しい子たちだから。誰かが悩めば、すぐに気がつき、そっと支えてくれる。そんな様子が垣間見られ、「こういう仲間っていいなあ」と憧れを感じます。さてさて、この後どうなっていくのでしょうか。二巻、三巻も見逃せません。

手づくり弁当でパワーをチャージ*

596-7『女の子の大好きなお弁当』 藤野 嘉子 || 著 文化出版局

満腹感はあるけどカロリーは少な目、おかずがたくさん、見た目もかわいいなど、女の子が好きなポイントをばっちり押さえた理想のお弁当のレシピが載っています。「明日はどのおかずにしようかな？」と毎日のメニューを決めるのが楽しくなるおいしそうなおかずがたくさん！さらに、端にちょこっと添えてあったら嬉しい甘いもののレシピも載っているのが魅力的です。見た目は凝っているけど作り方は簡単なので、作ってもらうのではなく、自分で作るのにも挑戦してみてください。しっかり食べて、午後の授業、部活も頑張らしましょう。



図書館の開館と貸出について

1年生もだんだんと図書館の利用に慣れてきたでしょうか。3年間を通し、図書館をフル活用してください。ここで、2、3年生も含めた全校生徒のみなさんにもう一度、図書館の開館と貸出について案内します。

開館日: 月曜～土曜 ※ 日・祝日は休館です。

開館時間: 通常 8:50～19:00 (※月曜は11:00より開館)

土曜 8:50～17:00

考査1週間前 8:50～17:15

考査中 8:50～17:00

※学校行事及び長期休暇中の開館に関しては、その都度、お知らせをします。

貸出冊数: 3冊

貸出期間: 新着本*1週間 その他*2週間 (雑誌も最新号以外は貸出可です)

みなさんの持っている生徒証が図書館の利用証となります。この生徒証があると貸出がスムーズに行えますので、用意をお願いします★
なお、1年生は生徒証が渡されるまでの間、仮の生徒証にて対応します。



マイしおりを作ってみよう

昨年、好評だったしおり制作を今年度もやります！！

制作ブースには、しおり作りに必要な道具を揃えてありますので、手ぶらで気軽に図書館へ作りこぎください。マスキングテープやペーパーチップス、切り絵などの用意もありますから、それらを駆使してマイ・ベスト・しおりを作りましょう。作ったしおりはもちろん持ち帰れます。朝読書の本や図書館で借りた本に使ってください。制作ブースは5月末まで図書館で常設している予定です。興味を持った人は時間を見つけて、来てください。待っています。



594-ブ『ブックカバーの本』 雄鶏者

しおりが出来上がったなら、今度は手作りブックカバーはいかが！？

この本を使えば、刺繍を入れて作ったり、毛糸を編んで作ったり、消しゴムはんこで柄を入れたり、色々な素材を使った、色々なデザインのブックカバーを作ることができます。心惹かれるデザインを見つけて、お気に入りのブックカバーを作りましょう。縫ったり、編んだり苦手…という人も紙を使ったブックカバーなら気軽にできると思うので、挑戦してみてください。手作りのしおりとブックカバーがきっと読書の時間をもっと楽しくしてくれるはず。

🇯🇵 ニッポン再発見 🇯🇵

図書館だよりでは1年ごとに特集を組んでいます。昨年度は、『今月の知っておきたい〇〇の世界』と題し、1年間企画を行いました。今年度は『ニッポン再発見』と題し、毎月、みなさんと一緒に日本の魅力を再発見していきたいと思えます。

第1回目の今回は、3月26日に北海道新幹線が開通し、観光客で賑わっている北海道編です。47都道府県の中で1番の面積を誇る北海道には名所や名物もたくさんありますが、みなさんはまずまっ先に何を思い浮かべますでしょうか。世界三大夜景にも挙げられる函館の夜景、札幌の雪まつりや時計台、世界遺産登録地域となっている知床、北海道三大景観のひとつとされる洞爺湖、自然に近い環境で動物が暮らす旭山動物園など、何度も訪れたいくなる地、北海道から、この三冊を紹介します。



一度は行きたい雪まつり

291-ル 『るるぶ 冬の北海道』 JTBパブリッシング

札幌の雪まつり、流氷クルーズ、SL冬の湿原号、星野リゾートトマムのアイスビレッジと霧氷テラス、イルミネーションなど、冬の北海道を満喫できる情報が盛りだくさんのガイドブックです。雪まつりの会場、約1.5kmの公園内に立ち並ぶ雪像は写真で見ただけでもその美しさに見とれてしまいます。ぜひ一度は行ってみたいものです。その他にも、札幌市時計台、北海道庁旧本庁舎、小樽運河など、北海道を代表する名所も雪景色の中で見ると、いつもとはまた違う魅力を感じられます。さらに、味噌ラーメンやスープカレー、ジンギスカンなど、寒い冬にこそ食べたい熱々の北海道グルメもたくさん紹介されています。心もお腹も存分に満たされる冬の北海道をこの1冊で知り尽くしましょう。

旭山動物園がすごい理由

480-コ 『<旭山動物園>革命』 星谷 菜々 || 著 大和書房

今や全国にその名を轟かせる人気の動物園、旭山動物園。しかし、その旭山動物園も一時は閉園の危機にも見舞われていたことをみなさんは知っていたでしょうか。目玉となる珍しい動物がいるわけでもなく、交通アクセスがよいわけでもない。それでも、スタッフが一丸となってアイデアを出し合い、手書きのポップや園内での様々な企画運営など予算がない中でも見せ方を工夫し、動物たちが自らの能力を発揮できる環境を整えて、子どもだけでなく、大人も楽しめる動物園へと生まれ変わっていったのです。その努力ひとつひとつから、「なるほど、だから旭山動物園は楽しいんだ」と旭山動物園の持つ魅力の理由が伝わってきます。また、動物たちの生態についてもこの本からよく学ぶことができます。

知床を知り尽くす

E-セ 『ぼくらは知床探検隊』 関屋 敏隆 || 著 岩崎書店

この絵本の中で知床を探検している「ふるさと少年探検隊」は、実際に知床羅臼町で毎年、小中学生の少年少女が行っているものです。その五泊六日の知床探検に同行した作者が探検の様子を描き、この絵本が出来上がりました。

探検隊は難所をいくつも超え、その先々で美しい景色に出会い、身体中で知床を感じながら、知床に生息する動物、知床で見られる植物、知床の歴史など様々なことを学んでいきます。子どもの探検とあなどれないスリルと感動が詰まったまさに大冒険です。大自然が作り出す圧倒的スケールの絶景を思い浮かべながら、自分も探検隊の一員になったつもりでこの探検から知床の魅力を感じてください。



図書館司書の「今月はこの本を読みました」



先月、北海道新幹線が開通し、いつかあれに乗って北海道に行きたいなと思っていたところ、ちょうど読んだ本の舞台がこの路線を走る新幹線「はやて」の中だったので今月は伊坂幸太郎さんの『マリ



アビートル』(913.6-イ角川書店)を紹介します。舞台は新幹線の中ですが、優雅に旅行気分を味わっているどころではなく、車内はかなり物騒なことになっています。裏の業界で名を馳せる二人組の蜜柑と檸檬。同じく裏の業界に身をおく運の悪い男 七尾。息子の仇討に燃える木村。見た目からは想像もつかない性悪中学生の王子。その他にも多数、物騒な人物がこれでもかかってくらい乗っている新幹線で何も起こらないはずはなく…、読んでいてハラハラしっぱなしです。物騒な仕事に就きつつもどこか憎めない蜜柑と檸檬、七尾に対し、王子はどこまでも性悪で「誰か王子を何とかして！」と最後まで心の中で叫びながら読みました。七尾の運の悪さも最後まですごかったなあ。【今井】

『やがて海へと届く』(913.6-A 講談社)彩瀬まる || 著 を、とてもよい本だよと紹介されて読んでみました。切なくて、哀しくて、でも、生きていくうえでは避けられない経験。真奈は東日本大震災で友人のすみれを失いました。すみれの彼氏の遠野君は引っ越しを期に、すみれの荷物を整理すると言います。すみれを想うことに違いはないけれど、その想い方の違いに真奈は戸惑います。「真奈にとって死んだ奴はずっと同じ場所に留まっているイメージなんだな。俺は、すみれなら歩いている気がするんだ。俺が同じところにいたらきつと置いていかれる」 作者はたまたま福島を旅行中の3月11日に、常磐線新地駅で地震と津波に遭遇しました。『暗い夜、星を数えて』には、その時の経験が書かれています。もし、電車を降りていなかったら、もし地元の女性と歩いていなかったら、もし背を追う波に追いつかれていたら、彼女自身がすみれと同じ運命をたどったはず。そう思うと『やがて海へと届く』は、作者が最期の瞬間に抱く大切な人々への願いとも思えます。今また熊本で大変なことが起こっています。家族や友人との突然の別れはいつ訪れるかわかりません。後悔の無いよう日々を過ごさねばと、改めて思いました。【鈴木】